

ブラウスの風

「さあ、お心を平らかにして……。どうぞ」

そう言って茶を供してくれた老僧の声と温顔は、今しがた終わった読経と同じく尊いもの思われた。僧は、卓上に立てた妻の小さな遺影にも茶を献じてくれた。

広からぬ境内から本堂に流れ入る浅春の風がささやくように私の髪を撫でる。微風は、ベージュのブラウスをまとった写真の妻の笑顔をも柔らかに包む。よい回向をしてもらえたとその優しい目が語っている。彼女の郷里にほど近い、しかし彼女の遺族に知られることもない山裾の、この小さな寺の門を叩いてよかった。

突然の来訪に應對してくれた老僧は驚きも見せず、黙して私の話に耳を傾け、私の思いを受け容れ、私を彼女の配偶者として遇してくれた。

写真を挟んで私と相對して座した僧は、静かに語を継いだ。

「思うに、この世間では、これまでお二人でつらい思いをされたことも——」

そうだ。二人でいろんな事に耐えてきた。最後に、半年前、彼女の両親が営んだ葬儀にも私は参列を拒まれていた。その折の言いようのない無念も去来した。

「はい——ありました。でも、世間にどう見られようと幸せでした。こういう仲ですから、子どもはいませんし、入籍も出来ませんでした。幸せでした。今も彼女に感謝しています」
今は幽明を隔てて写真の中に在る彼女の顔も、同じ答えをしていた。

老僧は柔和な笑みでうなずいた。

「よい方にめぐり会えてお幸せでした——。御仏の慈悲は廣大無辺。世を遍く照らします。また世の中自体も、誰もが等しく照らされる世の中であるべきです。見かけがどうであろうと、他人にどう見えようと、夫婦かどうかは当の二人だけが決めること。ですが……」

茶を一口含んで、諄々と語を重ねた。

「この世は濁世とも云います。偏見も無理解もつきもの……。それでも、苦あればまた楽もあり。生きられる限りは、悩みも喜びも味わい抜いて生きましよう。お互いに」

胸を浸す湯のような言葉に私は目礼し、喫し終えた茶碗のふちをハンカチで拭いた。それを潮にいとまを告げ、心ばかりのお布施を、固辞しようとする僧の手に押し付けた。

簡素な山門まで送ってくれた僧が石段脇に息吹き始めた草や小さな野の花を見やり、独り言めいてつぶやいた。「……みな懸命に咲いている」

視線を私に戻し、とうに分かっていただろう事を、今さら気づいたかのように口にした。

「旦那様のお洋服は、奥様のお写真とお揃いですな」

「はい。二人でペアで買ったんです。妻もこのブラウスが一番気に入ってました」
そう答えた私の微笑を、老僧の慈眼が同じ微笑で迎えてくれた。

深い感謝を込めて一礼し、山門を後に歩き出した私に、遠い残雪の山並みから訪れる風がまとわりつく。

仄かな甘みを含む清い風は、私の頬を包み、ブラウスの襟元から肌身に忍び入り、フレアスカート裾を軽く揺らした。風の中に彼女がいるような気がした。

